

この10月名古屋で催された土木学会全国大会は非常な盛会であった。特別講演もPR講演も、また部門別の講演もそれぞれが大成功であった。一般参加者も好天にめぐまれ折柄の名古屋まつりの賑わいもあってみごとな成果を上げたのであった。この成功は、本大会の開催に努力された大会関係者のご尽力の賜で、私も地元の一員として心からお礼を申上げる次第である。この大会に私ども後輩のためにPR講演にわざわざご来名を頂いた鈴木雅次先生にはこのたび文化勲章の受賞の榮譽を担われました。この報らせに私どもは心からお喜びを申上げる次第で、わが土木工学界初の榮譽をお受けになる先生のお喜びはさることながら、土木工学界の諸先輩の業績の大きい中に、ひときわ巨き足跡を残されたこの先生の榮譽を学会こそぞってお祝いを申し上げたいと思うものである。全国大会の大成につぐこの大朗報に、私ども土木工学界の幸先を祝ってやまない次第である。

ところで、全学留年というかつてない異常な状態の学校騒動がいまだに続いている。この春の土木学会総会で本会の前副会長であった水野九大学長がご挨拶の中に、工学部特に土木系学生の堅実と穏健さを、エンタープライズ事件にとってしみじみと話されたものだった。その後ジェット機墜落事件が起り、先生自らが先頭に立って抗議に立上らざるをえない破目になられたことをあわせて学校騒動の根の深さをしみじみと感じるのである。私どものような古い考えの持主には理解しがたいことが多い最近のできごとの中で、この学校騒動ほど心を痛めるものはない。大学のあり方についてはずいぶんとり上げられ論議され、甲論乙ばく尽きるところがない。象牙の塔にとじこもった大学という古い観念の殻に安住して、明治から大正、大正から昭和へと学の温奥を究めるための存在だったのは戦前であった。戦後の宇宙時代に続く急転には、旧型の大学がとてども対処してはいけなことは自明の理である。大学の教授が昔のように研究のみでは生きていけなくてアルバイトに身をやつし、助教授も講師も助手もみんなが不合理な教育界にあいそうをつかし、学生は教育ママの意のままに動くロボットのようないわゆる優良学生で自分の意思さえ持たないものがあるなど、まことに憂慮すべき状態である。大学はマスプロ時代に入って、法経などにおいては学生は有名教授の醫咳に接することなく、ほとんどが教授に対する尊敬や敬愛の念もなく精神的なつながりのないままの学生生活である。極端な人達の動きもさることながら、学園の古い因習と大学に親近感のない学生達の不平とが今日の学園騒動の根元であることは、だれしも認めるところである

* 正会員 副会長 中日本建設コンサルタント副社長

う。そうした中で、工学部の学生は法経のごとき多人数ではなく、それぞれの学生が教官との接触も多く親しく指導を受けうることが幸して、こうした極端な分子がないように聞くことは喜ばしい。しかし、工学の中でも特にわが土木工学においてきわめて広汎な学問であるために、その基礎学の修得から各分野の研修にはまことに骨が折れるので、これら学園騒動の渦中にある土木系学生の諸君にはまことにお気の毒に思う。そもそも土木学者は世の中の進歩のために地に爪跡をのこすもの、すなわち地球を相手とし人間の進歩のために生産の基盤をつくり、住みよい世界をつくり上げてゆく技術者である。戦後の土木技術の進歩は著しい。しかし、これは建築のそれに比しては優るものとはいえないであろう。土木の分野は、幅広くかつ深く建築のごときもその一部から分化したものである。土木工学の分野からかつて建築が分立独立していったように、都市、地域の計画学、防災工学、公害対策の中での環境衛生工学、都市交通工学等々独立すべき要素を包蔵するものが多い。いずれこれらは土木学会を中心とした形で新しい学会に分化してゆくべき運命をもつかもしい。しかし、土木技術の基礎的なものを十分に身につけた上でそれぞれ円満に分化していった欲しいものである。土木工学が非常に広汎であるだけに、医学のように大学の課程もなるべく長い方がいいのではないだろうか。大学院を卒業した人達の方が好ましいとされるのうかがえるのである。しかも、土木という総合技術の主役たるためには、人間形成の訓練も十分でなければならない。その意味でも教授を中心とした小人数での人間形成の場が特に望ましい。

つぎに、土木学会は何を考えるべきかである。学会には多種多様の委員会がある。そして、それぞれに有力なメンバーをかかえて、問題と取り組んで非常に有効な研究がなされている。しかし土木学会としては、やはり将来の日本のあり方に対する長期のビジョンをたててこれを提言して欲しいと思うのである。本州四国連絡の橋梁に関する研究成果もまことに立派であるが、政治問題となった今日では考えさせられるものがある。やはり土木学会としては、政治問題とならない前の、しかも長期的なイメージに立脚しての研究計画を樹立し、日本の国造りはかくあるべしという各種のビジョンを一つ一つ仕上げて提言することが必要であろう。また丸の内に立つ超高層建築問題で起こった論議のような形でなく、わが学会は将来新しくあるべしと考える正しい主張を長期計画にもとづいて会員の叡智をすぐり十分に研究し、その成果を世に問うことをなすべきである。私はこれが学会としての本来の姿であり使命であると信ずるものである。